

古英語福音書における *Heorte* と *Mod*

山本圭子

I. はじめに

Roberts, Kay and Grundy (1995) によれば、現代英語の “spirit, soul, heart” の対応語として *heorte* と *mod* を *sawol*, *ferhþ*, *hreþer* 他と共に挙げることができ、“mind, thought” の項にも *heorte* と *mod* が併記されている。Hall においては *heorte*, *mod*, (ge)*þanc* のいずれの意味にも “mind” が記載されている (*þanc* の場合は *Ælfric* に限定されている) 一方で、*mod* の訳語には “heart” が用いられている。また、*heorte* の意味として「体」に対立する概念である “soul, spirit” が用いられているが、同じ対概念が、Bosworth and Toller (以下、B & T) により *mod* の第一義として使われている——the inner man, the spiritual as opposed to the bodily part of the man. このように、「心」「思い」を表す古英語の類義語各々の意味の境界は不明瞭であり、特定文脈の中でもしばしば意味の決定が困難であるように思われる。本稿の目的は、これらの類義語の意味が新約聖書福音書の古英語訳においては明確に区別され特定の語が選択されている場合が多いことを示し、福音における各語の意味を明らかにすることである。

II. 印欧語における “heart” “mind” “thought”

古英語の福音書において “heart,” “mind,” “thought” に相当する語のうち、最も容易に歴史的变化を辿れるのは *heorte* “heart” であり、印欧諸語における大多数の対応語が単一の語源 **kerd-* に遡る (Buck: 251)。Pokorny では、(**kered-*;) **kerd-*, **kerd-* (e が長音), **krd-* (ゼロ階梯), **kred-* “Helz” (Pokorny: 579) が推定される。各対応語の中から本稿に直接関わりのある形のみを挙げると、ギリシャ語: καρδιά, (アッティカ方言); ラテン語: *cor* であり、古英語 *heorte* 同様「心臓」「心」の両義を持っていた。

現代英語の *mind* は古英語 *gemynd* に遡るが、意味の上では現代英語の “mood” となった *mod* のほうが近い (OE *mod* < Gmc **moðaz*, **moðam*)。 *mind* は Pokorny によれば **men-* “denken, geistig, erregt sein” に遡り、*mod* は **mē* “expressing certain qualities of mind (Watkins)” であるから、推定形は異なるものの意味は非常に近い。 *mod* は福音書においてはギリシャ語: νοῦς; ラテン語: *mens* にほぼ対応している。

現代英語 “thought” の形態は古英語において (ge)þoht であるが、意味においては同語源を持つ (ge)þanc がより近い (OE þanc < Gmc *þankaz < IE *tong- (Watkins: 93))。Pokorny において、þanc, þencan “to think,” および þyncan “to seem” が全て *tong- “denken, fühlen” (*tongā “Gefühl”) から派生したことが示されている。また、古高地ドイツ語の dank “denken, Gedanke, Dank” が古英語の þanc と同様の意味を派生したことも確認される。

以上により、語源に遡れば、gemynd は別として、heorte, mod と (ge)þanc/(ge)þoht それぞれの意味は近接するものの、重複は無いと言える。

Ⅲ. 古英語の複合語に見る heorte, mod, (ge)þanc の意味

古英語における heorte, mod, (ge)þanc の分布を、B & T と Hall に収録されている複合語の構成により概観する。複合語形成の際に、類義語のうちどの語が選択されているかを見ることにより、類義語間の意味の違いを推定することが可能となる。現代語訳は B & T と Hall による。

heorte を含む複合語は B & T と H の例を合わせて28語ある。まず、heorte=「心臓」の原義を反映する語 (heort-ece “pain at the heart,” heart-gesida “the entrails,” heort-hama “a covering of the heart”) に heorte と mod の最初の違いが見られる。heort-seoc “heart-sick” と並んで mod-seoc “sick at heart” が見られるが、*mod-ece は無い。次に、heorte の複合語の中で、一時的な感情に関わる語が mod より遙かに少ないことは注目に値する。明白な例は hat-heort “fury, anger,” bliðe-heortnys “happy, joyful,” heortgryre “terror of heart” のみである。永続性の強い性質、気性を表すものは多く、earn-heort “tender-hearted,” gram-heort “having a fierce, hostile heart or mind,” cealdheort “cruel,” riht-heort “upright in heart, righteous, just” rum-heort “of liberal heart,” mild-heort “kind-hearted, of gentle disposition” などがある。次に見るように、mod の複合語の状況はこの点でかなり異なっている。最後に、複合語になっても意味はほぼ単独の heorte と同じ heortscræf がある。scræf は “cave, cavern” であるから、特定の場所に納まる heorte の原義を表している。この組み合わせは、mod にはない。

heorte に比べると、mod の複合語は71例と多いが、そのうち一時的な喜怒哀楽を表わす語が非常に多く、「悲しみ」に関するものだけで以下の10語を数える：

dreorig-mod “sad of mind,” freorig-mod “sad in mind,” geomor-mod “sorrowful,” hreowig-mod “sad at heart,” reonig-mod “sad at heart, weary,” sarig-mod “sad-hearted, of mournful mood,” mod-cearu “sorrow of heart, grief,” mod-cwanig “sad at heart,” mod-geomor “sad at heart,” mod-sorh “care or sorrow of mind”

他に、*irre-mod* “of angry mood,” *modwyn* “heart’s joy,” *mod-blissiende* “rejoicing at heart,” *mod-bysgung* “anxiety of heart,” *hean-mod* “dejected, depressed” など、全ての例の3分の1以上が何らかの感情を表す語である。残りの大部分が永続的な気性や傾向を表すもので、*heorte* に比べて特に理性による制御を必要とする資質を描写するものが目立つ：*an-mod* “steadfast, eager, bold,” *deor-mod* “brave in mind, bold,” *gewealden-mod* “subdued in mind, self-controlled,” *hwæt-mod* “stout-hearted, bold,” *micel-mod* “having a great mind, magnanimous,” *mod-cræft* “mental power or skill,” *stið-mod* “of constant mind, resolute” など。さらに、*heorte* 複合語には無い「賢明さ」を表す語が複数あることにより、*mod* が理性の領域を表す意味を持っていたことは明らかである：*gleaw-mod* “of wise mind,” *mod-snotor* “prudent of mind, wise, sagacious,” *pancol-mod* “wise, intelligent.”

mod の複合語にも単独の *mod* とほぼ同一の意味を持つものがあるが、*heorte* と異なり複合語の第二要素は *mod* の類義語であることに注意する必要がある：*mod-geþanc*, *mod-geþoht* “mind, thought,” *mod-gehygd* “thought,” *mod-sefa* “mind, spirit, understanding, heart.”

以上の例から *mod* は *heorte* に比して、より具体的、特定の（そのためしばしば一時的な）「心」の機能を表していたと考えられる。*mod* は前述のように、喜怒哀楽を表す語と共に複合語を形成する場合があったが、現代英語に至るまでにこの結合の大部分が *mind* に受け継がれることなく失われている。例えば現代英語に *glad-hearted* はあるが **glad-minded* は無く、*heavy-hearted* の意味は理解できるが、*heavy-minded* は理解が困難である。したがって、中英語以降の文献の詳細な調査が必要ではあるが、結果的には *mod* の意味の一部を *mind* ではなく *heart* が受け継いだとすることができる。

(*ge*)*þanc* は動詞派生の名詞であり、広範囲の心的活動を表すことができたと見られるが、他の印欧諸語の対応形と同様、一般的な心的活動の意味の下位クラスに相当する特定の意味も持っていたことがわかっている (Buck: 1202)。すなわち古英語の場合は “thought, reflection” に加えて “gratitude” の意味を派生したのであり、後者は現在の *thank* が受け継いでいる。(*ge*)*þanc* の複合語は14例と少なく、*beal-þanc* “a baleful or wicked thought,” *fore-þanc* “forethought, consideration,” *hete-þanc* “a hostile thought,” *inwit-þanc* “evil, malicious, deceitful thought or purpose,” *þanc-metung* “deliberation, consideration” 等、特定種類の思考を表すものが多い。次のようにさらに特殊化が進んだ例もある。

searu-þanc: *searo þancum* beseted “beset with snares”

(Andr. Kimbl. 2511; An. 1257. (B & T))

ここまで、三つの語の違いを中心にそれぞれの複合語を概観したが、前述の *heort-seoc*, *mod-seoc* 以外にも複合語の要素が共通している例があるので、これらにおいてどの程度

相互の意味が似通っているのかを次に見る。heorte, mod, (ge)þanc 全てに共通する要素は無く、heorte と mod に共通例が (heorte 複合語の総数から見れば) 目立つ。以下、既出例を含む:

mod-snotor “prudent of mind, wise, sagacious,”	þanc-snot[t]or “wise in thought, wise”
bliðe-heortnys “merry-heartedness, kind, merciful”	bliðe-mod “blithe of mind, glad, cheerful”
gram-heart “having a fierce, hostile heart or mind”	gram-mod “of a fierce, hostile mind”
heah-heart “high-hearted, haughty, proud”	heah-mod “noble, proud, haughty, exultant”
heard-heart “hard-hearted, stiff-necked”	heard-mod “of a hard, unyielding spirit, brave”
rum-heart “of liberal heart, liberal, munificent”	rum-mod “of liberal mind, liberal in giving, gracious, kind”
heort-lufe “love which comes from the heart”	mod-lufu “heart’s love, affection”
heort-seoc “heart-sick”	mod-seoc “sick at heart, with mind disease, distressed”

mod-snotor と þanc-snot[t]or、bliðe-heortnys と bliðe-mod など、少なくとも語義を見る限りでは区別が困難な対のほうが多い。heard-heart と heard-mod の意味が評価的に逆であることは大変興味深いが、この対以外は、確実に一方が排除される特定文脈を想定しにくい語義である。したがって、特に heorte と mod の意味には共通領域があったことは確かである¹⁾。

現代英語においても、minded は hearted よりも複合語の生産性が高い。ただし、その差は古英語よりも遙かに顕著である。minded が名詞と結びついて「～に関心がある、熱心である」という意味の複合語を形成する場合、実際上いかなる名詞と結びつくことも可能である: career-minded, sports-minded, sales-minded, fitness-minded, show-minded, thrifty-minded, vote-minded, tabloid-minded 等。古英語との生産性の違いは、複合語の形成規則と使用頻度の変化による影響も考えられるが、mind の decolorization が (思考や行動の傾向、という程度に) 進行している可能性もある。その場合は、-minded 複合語は文法化

1) 現代英語においてもこれらの類義語の意味はしばしば特定が困難である。以下はインターネット上の Wordreference.com の BBS における、辞書に記載のない “heavy-minded” の意味についての質問と回答の抜粋である。

Fracrosby: Can someone help me to understand what heavy-minded means? Thank you
(Location: Rome; Native language: Italian)

CAMullen: I have never heard the term before, although “heavy” is often used to mean “sad.” Maybe that’s what it means.
(Location: Amesbury; Native language: US, English; Age: 61)

Jmattson: It is important to be light hearted, not light minded. To be heavy minded is to be considerate on an issue, study it, and thoroughly examine it. Hence, to be light minded means that one doesn’t really care at all.
(Native language: USA-English; Junior member)

(<http://www.wordreference.com/>)

の一例と見ることにもできるが、本稿の範囲を超える議論であろう。

IV. 1 福音書の *heorte*

Arndt and Gingrich (以後、A & G) によれば、コイネーの *καρδία* には「心臓」と「心(人間のあらゆる内的生活の座)」の意味があり、後者は「思考」「意志」「道義」「感情」「気質」の場を表す。注意を要するのは 1. β. の意味 “of the faculty of thought, of the thoughts themselves, of understanding, as the organ of natural and spiritual enlightenment.... In this area κ. may oft. be transl. mind” である。しかし、福音書に 56 例ある *καρδία* はラテン語訳において全て *cor* と訳されており、ギリシャ語とラテン語の間には、この概念に関する顕著な違いが VUL の訳者によって認められなかったことが示されている。しかし、古英語写本においては相当に状況が違っている。以下、*καρδία*-*cor* の主要な意味に対応する古英語写本の語句の選択を詳細に示す。現代英語訳は RSV から引用する。

(1) 「(外的な体に相対する) 内的な心の総体」

Mt 5: 28

BGT ἐγὼ δὲ λέγω ὑμῖν ὅτι πᾶς ὁ βλέπων γυναῖκα πρὸς τὸ ἐπιθυμῆσαι αὐτήν ἤδη ἐμοίχευσε αὐτήν ἐν τῇ καρδίᾳ αὐτοῦ.

VUL ego autem dico vobis quoniam omnis qui viderit mulierem ad concupiscendum eam iam moechatus est eam *in corde suo*

C soðlice ic secge eow. ðæt ælc þæra þe wif gesyhð and hyre gewylnað. eallunga ðæt se ge-syngað on hys heortan;

RSV But I say to you that every one who looks at a woman lustfully has already committed adultery with her *in his heart*.

この一節では、体の罪と心の罪が対比により示されている。このように「口に出さず、表に出さずに考えを抱く」場合、しばしば *καρδία*, *cor* と *heorte* が用いられる。Mt 9: 4においても、BGT: “ἐνθυμέισθε...ἐν ταῖς καρδίαις ὑμῶν”; VUL: “cogitates...in cordibus vestris”; C: “þence...on eowrum heortum (心の中で思う)” とあるように、外と内との対比を明確に示すためにこれらの語が使用されるのである。望ましくない「行為」が「心」から出てくると説く Mt 15: 18, 19や、「口先で」イエスを敬い「心」は離れていると指摘する Mt 15: 8、表面だけでなく心から兄弟を赦さなければならないと説く Mt 18: 35も同様である。

C: gyf ge of eowrum heortum eowrum broðrum ne forgyfaþ

RSV: if you do not forgive your brother from your heart.

また、「心の中で思う」は Mt 3: 9 を例に取れば、BGT で “λέγειν ἐν ἑαυτοῖς,” VUL で “dicere intra vos,” 古英語訳でも、C を例に取れば “cwebað betwux eow” 「自分の内と言う」という表現によって原典に忠実な対応がなされる場合もある。

しかし、一見して Mt 3: 9 と同様の環境にある Mt: 9: 21 では、C と H で heorte ではなく mod が選ばれている。ラテン語訳が *intra se* であるから、Li と R ではそれぞれ bituih hir deiglice “in herself secretly,” in innan hire “inside herself” のように、ほぼ逐語訳になっており、C と H が特徴のある選択をしたことがわかる。

Mt 9: 21

BGT: ἔλεγεν γὰρ ἐν ἑαυτῇ ἐὰν μόνον ἄψωμαι τοῦ ἱματίου αὐτοῦ σωθήσομαι.

VUL: *dicebat enim intra se si tetigero tantum vestimentum eius salva ero*

C: heo *cwað soðlice on hyre mode* forþan ic beo hal gyf ic hys reafes æthrine;

RSV: for she *said to herself,*” If I only touch his garment, I shall be made well.”

この箇所の C と H における選択が注目に値するのは、次に見られるように、*intra vos* の形式でも、*in cordibus vestris* の形式でも、C (および H) では逐語訳がなされることが、少なくとも Mt においては通常であったためである。

Mt 3: 9

VUL: *intra vos*

C: betwux eow

RSV: to yourselves

Mt 9: 3

VUL: *intra se*

C: him hetwynan

RSV: to themselves

Mt 9: 4

VUL: *in cordibus vestries*

C: on eowrum heortum

RSV: in your hearts

Matthew 24: 48:

VUL: *in corde suo*

C: on hys heortan

RSV: to himself

これらと Mt: 9: 21 の違いは、Mt: 9: 21 のみが、条件節を含み相対的に複雑な思考内容を表しているという点である。原典と VUL では差が見られないが、古英語写本 C, H では「思考」の座としてよりふさわしいのは mod であると判断されたと見ることができる²⁾。

2) ウェストサクソン方言各写本の Mt の訳者が複数でないことを前提にしている。

同様に条件節を含む L の例では、*on hys geþance* (C), *on his ge-þance* (H) のように þanc が使われており、この þanc はやや具体的な思考内容を表す印象はあるものの、mod とほぼ同義と見てよい。Li は VUL の逐語訳となっており、R は欠落している。

L 7: 39

BGT: ἰδὼν δὲ ὁ Φαρισαῖος ὁ καλέσας αὐτὸν εἶπεν ἐν ἑαυτῷ λέγων. οὗτος εἰ ἦν προφήτης, ἐγίνωσκεν ἂν τίς καὶ ποταπὴ ἡ γυνὴ ἣτις ἄπτεται αὐτοῦ, ὅτι ἀμαρτωλὸς ἐστίν.

VUL: videns autem Pharisaeus qui vocaverat eum *ait intra se dicens* hic si esset propheta sciret utique quae et qualis mulier quae tangit eum quia peccatrix est

C: ða se sundor-halga þe hyne ingelaðode þæt geseah. *He cwæþ on hys geþance*; Gyf þe man witega wære. Witodlice he wiste hwæt. and hwylc þis wif wære þe his æt-hrinþ þæt heo sinful is;

RSV: Now when the Pharisee who had invited him saw it, he *said to himself*, "If this man were a prophet, he would have known who and what sort of woman this is who is touching him, for she is a sinner."

次の例は条件節は含まないものの、2 節に渡って管理人の思案が描かれ、やはり C, H では *geþanc* が使われている。L は逐語訳で、R は欠落している。

L 16: 3, 4

BGT: εἶπεν δὲ ἐν ἑαυτῷ ὁ οἰκονόμος. τί ποιήσω, ὅτι ὁ κύριός μου ἀφαιρεῖται τὴν οἰκονομίαν ἀπ' ἐμοῦ; σκάπτειν οὐκ ἰσχύω, ἐπαιτεῖν αἰσχύνομαι. ἔγνων τί ποιήσω, ἵνα ὅταν μετασταθῶ ἐκ τῆς οἰκονομίας δέξωνταί με εἰς τοὺς οἴκους αὐτῶν.

VUL: *ait* autem vilicus *intra se* quid faciam quia dominus meus aufert a me vilicationem fodere non valeo mendicare erubesco

C: ða *cwæþ* se gerefa *on his geþance*; Hwæt do ic for-þam þe min hlaford mine gerefscore fram me nymð; Ne mæg ic delfan. me sceamað þæt ic wædlige. Ic wat hwæt ic do þæt hig me on hyra hus onfon þonne ic be-scired beo fram tun-scire;

RSV: And the steward *said to himself*, "What shall I do, since my master is taking the stewardship away from me? I am not strong enough to dig, and I am ashamed to beg.

I have decided what to do, so that people may receive me into their houses when I am put out of the stewardship."

口に出すことと心にあることの関係は、Mt 12: 34にも見られる。

- BGT γεννήματα ἐχιδνῶν, πῶς δύνασθε ἀγαθὰ λαλεῖν ποιηροὶ ὄντες; ἐκ γὰρ τοῦ περισσεύματος τῆς καρδίας τὸ στόμα λαλεῖ.
- VUL progenies viperarum quomodo potestis bona loqui cum sitis mali *ex abundantia* enim *cordis* os loquitur
- C ...Soþlice of þære heortan willan se muþ spicþ.
- H ...Soþlice on þære heortan willan se muð spæcð
- Li ...from monigfaldnisse forþon hearta muð sprecaþ
- R ...of nyhtnisse forþon heorta muð spreocaþ
- RSV ...For out of the abundance of the heart the mouth speaks.

ex abundantia の訳について、写本により違いが見られる。C と H においては意味が誤解されやすい *manigfealdnes* (“complexity” の意味がある) や *nyhtness* (使用頻度が低い) ではなく、比喩的な意味を持つ *wella* “spring, fountain” が選ばれている。口にしたことを心で疑わなければ実現する、というくだりの Mk 11: 23 も同様である。

(2) 「思考」の座

Mt 13: 15 はイザヤ書からの引用箇所である。「心で理解しない」という句から、この *heorte* が A & G の “of the faculty of thought, of the thoughts themselves, of understanding, as the organ of natural and spiritual enlightenment” の意味で用いられていることは明らかである。C 以外の OE 写本も *heorte* で一致している。

- BGT ἐπαχύνθη γὰρ ἡ καρδία τοῦ λαοῦ τούτου, καὶ τοῖς ὠσὶν βαρέως ἤκουσαν καὶ τοὺς ὀφθαλμοὺς αὐτῶν ἐκάμμυσαν, μήποτε ἴδωσιν τοῖς ὀφθαλμοῖς καὶ τοῖς ὠσὶν ἀκούσωσιν καὶ τῇ καρδίᾳ συνῶσιν καὶ ἐπιστρέψωσιν καὶ ἰάσομαι αὐτούς.
- VUL *incrassatum est enim cor populi huius et auribus graviter audierunt et oculos suos cluserunt nequando oculis videant et auribus audiant et corde intellegant et convertantur et sanem eos*
- C Soþlice þises folces *heorte* is ahyrd. and hig hefelice mid earum gehyrdon. and hyra eagan beclysdon. Þe læs hig æfre mid eagam geseon and mid earum gehyron. and *mid heortan ongyton.* and sin gecyrrede and ic hig gehæle;
- RSV For this people’s *heart* has grown dull, and their ears are heavy of hearing, and their eyes they have closed, lest they should perceive with their eyes, and hear with their ears, and *understand with their heart*, and turn for me to heal them.

Mt 13: 19: 「理解する力が無い場合、蒔かれたものを奪い取る」のであるから、この箇所
の「心」も思考の座であると言える。OE 写本では全て *heorte* が選ばれている。

BGT παντὸς ἀκούοντος τὸν λόγον τῆς βασιλείας καὶ μὴ συνιέντος ἔρχεται ὁ ποιηρὸς καὶ
ἀρπάζει τὸ ἐσπαρμένον ἐν τῇ καρδίᾳ αὐτοῦ, οὗτός ἐστιν ὁ παρὰ τὴν ὁδὸν σπαρείς.

VUL omnis qui audit verbum regni et non intellegit venit malus et rapit quod
seminatum est *in corde eius* hic est qui secus viam seminatus est

C Ælc þæra þe godes wurd gehyrð and ne ongyt. Þonne cymþ deoful and
bereafað þæt *on hys heortan* asawen is. Þæt is se þe wiþ ðone weg asawen is

RSV: When any one hears the word of the kingdom and does not understand it, the
evil one comes and snatches away what is sown *in his heart*; this is what was
sown along the path.

しかし、前述のように、「思考」の機能が *mod/(ge)þanc* と結びつくと考えられていたと
するならば、これらの箇所で *heorte* が選ばれているのは重要な例外ということになって
しまう。または、*heorte* と *mod/(ge)þanc* の意味領域に共通部分があるとも考えることも
当然であるであろう。しかし、ここではその解釈を取らない。*heorte* が担う Mt 13: 15; 19
他における「理解」は全て神の知の理解に関わるものであり³⁾、L 16: 3, 4のような現世的
な思案とは区別して扱われていたと考えるべきである。実際に、*καρδία* と共起する福音書
内の動詞を見ると、Grk: συνίημι および対応する VUL: intellego は全て神／キリストの言
葉、知の理解について表している。以下に該当箇所を全て挙げる： Mt: 13: 13, 15, 19, 23,
51; 15: 10; 16: 12; 17: 13; Mk 4: 12; 6: 52; 7: 14; 8: 17; 8: 21; L 2: 50; 8: 10; 18: 34; 24:
45. また、Mt 5: 8にある *clæn-heortan* の *clæn* も、宗教的、道義的に “pure” であること
を示している。

BGT: μακάριοι οἱ καθαροὶ τῇ καρδίᾳ, ὅτι αὐτοὶ τὸν θεὸν ὄψονται.

VUL: beati *mundo corde* quoniam ipsi Deum videbunt

C: Eadige synt þa *clæn-heortan*. forþam þe hi god ge-seoð;

RSV: Blessed are the pure in heart, for they shall see God.

このように、*heorte* と共起する語は、一般的な意味と見えて実際には宗教的な解釈を持つ
場合が多いことがわかる。対して、*mod* にはそのようなことは無い。

神の真理を理解すべき場としての *heorte* が明らかに描かれているのが次の一節で
ある。

3) 新共同訳では、「理解する」「分かる」「悟る」の三つの訳語が使い分けられている。

Mk 3: 5

BGT: καὶ περιβλεψάμενος αὐτοὺς μετ' ὀργῆς, συλλυπούμενος ἐπὶ τῇ πωρώσει τῆς καρδίας αὐτῶν λέγει τῷ ἀνθρώπῳ ἔκτεινον τὴν χεῖρά καὶ ἐξέτεινεν καὶ ἀπεκατεστάθη ἡ χεὶρ αὐτοῦ.

VUL: et circumspiciens eos cum ira contristatus super *caecitatem cordis eorum* dicit homini extende manum tuam et extendit et restituta est manus illi

C and hi besceawiende mid yre ofer *hyra heortan blindnesse* ge-unret cwæð to þam men; Aþene þine hand. and he aþenede hi. Ða wearð his hand ge-hæled sona;

RSV: And he looked around at them with anger, grieved at *their hardness of heart*, and said to the man, "Stretch out your hand." He stretched it out, and his hand was restored.

RSVでは“hardness of heart”であり、次節に見る Mt 19: 8と同じ表現を用いているが、内容は全く異なるものである。この箇所では、BGTのπώρωσις “dullness, insensibility, obstinacy” に対し、VUL: caecitas “blindness,” OE: blindnes “blindness” となっているが、基本的な対応はむしろ BGTの τυφλός “blind” に対して、VUL、OE 訳ともに、それぞれ上記と派生関係にある語、caecus と blind を当てる場合である (Mt 9: 27他多数)。つまり VUL と OE の Mk 3: 5は、原典には見られない隠喩による対応を示しているのである。VUL と OE においては、heorte に光の射さない状態と、肉体的な視力の無い状態が明確に関連づけられている。これは原典において直接には見られない解釈として、極めて重要である。このような場合、heorte は sawel と同一視される傾向にある (Roberts, Kay & Grundy)。ただし、“sawle blindness” という表現は福音書に存在せず、その他の連語においても sawel は heorte と異なっている。二つの概念は常に明確に区別されていたと見るのが妥当である。Mk 6: 52も Mk 3: 5と同様である。

(3) 「気質」の座

Mt 19: 8

BGT: λέγει αὐτοῖς ὅτι Μωϋσῆς πρὸς τὴν σκληροκαρδίαν ὑμῶν ἐπέτρεψεν ὑμῖν ἀπολύσαι τὰς γυναῖκας ὑμῶν, ἀπ' ἀρχῆς δὲ οὐ γέγονεν οὕτως.

VUL: ait illis quoniam Moses ad *duritiam cordis vestri* permisit vobis dimittere uxores vestras ab initio autem non sic fuit

C: ða cwæð he moyses for *eower heortan heardnesse*. lyfde eow eower wif to forlætenne; [Soðlice næs hyt on frymðe swa.]⁴⁾

4) Li のみ heardnesse ではなく stiðnise (stiðnes) が使われている。ラテン語の duritia にある “austerity” の意味を反映しようとしたものか。

RSV: He said to them, “For *your hardness of heart* Moses allowed you to divorce your wives, but from the beginning it was not so.

Ⅲで述べたように、複合語の意味を見る限り、*heorte* が *heard* であることは、*mod* が *heard* である場合と異なり、専ら望ましくない状態を表したようである。

heard-heort “hard-hearted, stiff-necked (B & T); hard-hearted, stubborn (H)”

heard-mod “of a hard, unyielding spirit, self-confident, stout-hearted, brave (B & T); brave, bold, over-confident, obstinate (H)”

heard そのものには、“brave (B & T)” など肯定的な意味も備わっていることが重要である。*heorte* は柔軟で寛容であるのが本来の姿であると考えられていたと言えるであろう。

この気質の座としての意味においては、一見、宗教的な解釈の無い場合が多いように見える。しかし、*milde* 等「良い気質」として描かれる性質は全て神／キリストの性質でもあるという点において (Keizer1918)、宗教的な意味から自由であるとは言えない。Mt 11: 29 “*ic eom bilwite and eadmod on heortan (C)*” も同様である。

2 *heorte* と *mod*

heorte と *mod* の意味は互いに関連を持つものではあるが、明確に区別されていたことは先ず次の “mind of heart” という連語により明らかである。

L 1: 51

BGT: Ἐποίησεν κράτος ἐν βραχίονι αὐτοῦ, διεσκόρπισεν ὑπερηφάνους *διανοίᾳ καρδίας* αὐτῶν.

VUL: fecit potentiam in brachio suo dispersit superbos *mente cordis* sui

C: He worhte [mægne] on hys earme. He to-dælde þa ofer-modan. On *mode hyra heortan*;

Li: dyde mæht on arme his to-straegd ða oferhygdege mið *ðoht heortes* his

RSV: He has shown strength with his arm, he has scattered the proud *in the imagination of their hearts*,

VUL の *mens* “mind, heart, soul, understanding, intellect, thought, purpose” (BGT の *διάνοια*) が C, H では *mod*、Li, R では *ðoht* となっていることから、*heorte* と *mod* よりもむしろ *mod* と *ðoht* の意味が近接していたことが知れる。さらに、次の3箇所の並行記述

において、「heorte と mod と sawel により神を愛せよ」とあることから、heorte と mod (と sawel) の区別が明確であったことがわかる。

Mt 22: 37

BGT: ὁ δὲ ἔφη αὐτῷ ἀγαπήσεις κύριον τὸν θεόν σου ἐν ὅλῃ τῇ καρδίᾳ σου καὶ ἐν ὅλῃ τῇ ψυχῇ σου καὶ ἐν ὅλῃ τῇ διανοίᾳ σου.

VUL: ait illi Iesus diliges Dominum Deum tuum ex toto corde tuo et in tota anima tua et in tota mente tua

C: ða cwæð se hælend. lufa driften ðinne god on ealre ðinre heortan. and on ealre ðinre sawle. and on eallum ðinum mode.

RSV: And he said to him, "You shall love the Lord your God with all your heart, and with all your soul, and with all your mind.

この箇所の heorte の使用は OE の全ての写本で同様であるが、VUL の mens に対し、C, H, R では mod、Li のみ doht が用いられている。

Mk: 12: 30

BGT: καὶ ἀγαπήσεις κύριον τὸν θεόν σου ἐξ ὅλης τῆς καρδιάς σου καὶ ἐξ ὅλης τῆς ψυχῆς σου καὶ ἐξ ὅλης τῆς διανοίας σου καὶ ἐξ ὅλης τῆς ἰσχύος σου.

VUL: et diliges Dominum Deum tuum ex toto corde tuo et ex tota anima tua et ex tota mente tua et ex tota virtute tua hoc est primum mandatum

C: and lufa ðinne drihten god. of ealre ðinre heortan. and of ealre ðinre sawle. eallum ðinum mode. and of eallum ðinum mægene. þæt is þæt fyrmeste bebod;

RSV: and you shall love the Lord your God with all your heart, and with all your soul, and with all your mind, and with all your strength.

ここでは、C, H において mod、Li において doht、R において geðoht (giðohte) が対応している。

Lk 10: 27

BGT: ὁ δὲ ἀποκριθεὶς εἶπεν ἀγαπήσεις κύριον τὸν θεόν σου ἐξ ὅλης [τῆς] καρδιάς σου καὶ ἐν ὅλῃ τῇ ψυχῇ σου καὶ ἐν ὅλῃ τῇ ἰσχύϊ σου καὶ ἐν ὅλῃ τῇ διανοίᾳ σου, καὶ τὸν πλησίον σου ὡς σεαυτόν.

VUL: ille respondens dixit diliges Dominum Deum tuum ex toto corde tuo et ex tota anima tua et ex omnibus viribus tuis et ex omni mente tua et proximum tuum

sicut te ipsum

C: Ða andswarude he. lufa drihten þinne god of ealre þinne heortan. and of ealre þinne sawle. and of eallum þinum mihtum and of eallum þinum *mægene*. and þinne nehstan swa ðe sylfne;

RSV: And he answered, “You shall love the Lord your God with all your heart, and with all your soul, and with all your strength, and with all your *mind*; and your neighbor as yourself.”

C, Hでは *mægen*、Liでは *ðoht*、Rは欠落している。C, Hが *mægen* を選択しているのは、先行する *miht* (体の力) と、“(mental) ability, virtue” の意味を持つ *mægen* との対照のためであると考えられる。

Liでは上記以外の箇所を含め一貫して、*mens* に対し *mod* ではなく *ðoht* が使われている (L 8: 35; 24: 4; Mk 5: 15)。Rについては、Liに倣う場合 (L 1: 51; Mk 12: 30) とそうでない場合 (Mt 22: 37) があるが、二人の異なる註解者 (Farman と Owun) による相違であると言ってよい。比較的自由的な訳を行った Farman が C, H と同じ *mod* を選択していることから、*ðoht* は Li に特徴的な訳語と見えるが、Li に限られているわけではない。例えば、VUL の新約部分の *cogitatio* について見ると、OE 訳における訳語の分布は以下の通りである。

	C	H	Li	R*
(ge)þanc	10	10	0	0
(ge)ðoht	1	1	0	3
smeaung	0	0	11	5

*Rは三か所において欠落している

Rにおいて (ge)ðoht が使われているのは、全て Farman によるとされる箇所である。C, H における (ge)ðoht は一箇所であり、他の10箇所と内容的に異なるのは、イエスが見抜いたり新たに知ったりする人々の思いを表すことが多い他の箇所に比べて、思考内容が具体性を欠いている点である。しかし、これを (ge)ðoht 選択の理由とするには例が少な過ぎる。

Lk 2: 35

BGT: καὶ σοῦ [ðè] αὐτῆς τὴν ψυχὴν διελεύσεται ῥομφαία, ὅπως ἂν ἀποκαλυφθῶσιν ἐκ πολλῶν καρδιῶν *διαλογισμοί*.

VUL: et tuam ipsius animam pertransiet gladius ut revelentur ex multis cordibus *cogitations*

C: And his swurd þine sawle þurh-færð. Ðæt *geþohtas* syn awrigene of manegum

heortum;

RSV: (and a sword will pierce through your own soul also), that *thoughts* out of many hearts may be revealed.”

Cf. Lk 9: 47

BGT: ὁ δὲ Ἰησοῦς εἰδὼς τὸν διαλογισμὸν τῆς καρδίας αὐτῶν, ἐπιλαβόμενος παιδίον ἔστηεν αὐτὸ παρ’ ἑαυτῷ

VUL: at Iesus videns cogitationes cordis illorum adprehendens puerum statuit eum secus se

C: ða se hælend geseh hyra heortan *geþancas* he ge-sette þæne cnapan wiþ hine

RSV: But when Jesus perceived the thought of their hearts, he took a child and put him by his side,

(ge)þanc (<Gm *thankaz) と (ge)ðoht (<Gm*(ga)thanht-) はともに*tongに遡る (Watkins; Pokorny) が、(ge)þanc が “will, purpose; thanks” の意味を “thought” に合わせ持つ点で異なっている。(ge)ðoht “process of thinking (Hall)” がより原義に近く、Lk 2: 35はそれを反映させたものと見ることもできるが、例が少ないため確実ではない。R (Farman) において (ge)ðoht がより好まれているのは、(ge)þanc が “thanks, gratitude” の意味を持つので避けたためである可能性が高いと思われる。

smeaung は本来の意味 “search, inquiry (Bosworth & Toller)” から、“inquiry carried on by the mind” の意味が派生したもので、より深く徹底した思考を表す。Li が smeaung のみを用いたのは、この語のみが cogitatio に対する適切な選択肢であるとの註解者の判断を示すに他ならない。Li では、他に選択肢がある場合は “or” に相当する記号によってそれを示すからである: cogitantes に対し、smeadon “or” ðohton (Mk 2: 8); cogitantes に対し、ðencendo “or” smeande (Mk 2: 6) など。ただし、smeaung は、北部方言に限られた語ではなく (Hall; Bosworth & Toller)、個人変異を示すものである可能性が高い。

注目すべきなのは、福音書では (ge)þanc も smeaung も、「heorte の中の (ge)þanc (表に現れない思いであることを示す)」のように heorte と共に用いられるものの (Mt 9: 4; 12: 25; 15: 19; L 2: 35; 9: 47; 24: 38)、mod と共には現れないことである。ここでもまた、heorte と mod の区別が示される。一方、前述のように mind と (ge)þanc/(ge)ðoht は福音書においても区別しがたいが、それは (ge)þanc/(ge)ðoht が mind の具体的な (形として認識できるかのように感じる) 動きであり働きであるためであり、実際には区別は容易であったと考えられる。福音書の全ての例において (ge)þanc/(ge)ðoht が複数、mod が単数で表されていることも、具体性という点における両者の違いを示していると言ってよい。

このように、福音書においてははっきりと識別されていたと考えられる heorte, mod,

(ge)þanc/(ge)ðoht であるが、*gast* “spirit” または *sawel* “soul” と異なり、全て現世的・人間的な性質を持つとされた点において共通している。新共同訳聖書（1988）ではキリストの「心」の描写がなされる箇所があるが、OE 訳では *heorte/mod*/(ge)þanc/(ge)ðoht ではなく *sawel* (VUL: *anima*) または *gast* (VUL: *spiritus*) が使われており、現世的な性質を持つ概念と神に属する性質の概念が峻別されていたことが表れている。次は一例である。

Mk 8: 12

VUL: et ingemescens *spiritu* ait...

H: Ða cwæð he reowsiende on his *gaste*.

新共同訳: イエスは、心の中で深く嘆いて言われた。

V. 結 語

OE 複合語の構成を見る限りでは意味に共通部分が多いように思われる *heorte* と *mod*、その他の類義語について、福音書においては訳者・註解者により明確に区別され使用されていたことを、VUL 訳と使用文脈を含め各語の使用例の詳細な考察により示した。

福音書において *heorte* は現世的・人間的なものでありながら *sawel* (*soul*) の在り処と言ってよく、神の真理を理解するべく人に備わった場として描かれ、その知的な働きが描写されるのは、人が神とキリストの知に関わることがらを理解する／しない場面に限られている。この点で、現実の状況に応じながらその態を変えていく *mod* と、*mod* の表象の一部としての (ge)þanc/(ge)ðoht と異なっている。

略号

BGT	BNT and LXT texts (BibleWorks)
C	Corpus MS.
Gmc	Germanic
Grk	Greek
H	Hatton MS.
J	The Gospel according to Saint John
L	The Gospel according to Saint Luke
Li	Lindisfarne gloss
Mk	The Gospel according to Saint Mark
Mt	The Gospel according to Saint Matthew
OE	Old English
R	Rushworth gloss
RSV	Revised Standard Version

VUL Vulgar Latin text

データベース

BibleWorks 7. 2006. Norfolk: BibleWorks LLC.

Liuzza, R. M. 1994. (ed.) *The Old English Version of the Gospels*. 2vols. Oxford: Oxford University Press.

Skeat, W. W. 1871-1887. (ed.) *The Gospels according to Saint Matthew, Saint Mark, Saint Luke, and Saint John in Anglo-Saxon, Northumbrian, and Old Mercian Versions, Synoptically Arranged, with Collations Exhibiting All the Readings of All the MSS*. Cambridge: Cambridge University Press.

聖書新共同訳. 1988. 東京: 日本聖書協会.

引用文献

Amdt, W. and F. Wilbur Gingrich. 1958. *A Greek-English Lexicon of the New Testament and Other Early Christian Literature. A Translation and Adaptation of the 4th revised and augmented ed. of Walter Bauer's Griechisch-Deutsches Wörterbuch zu den Schriften des Neuen Testaments und der übrigen urchristlichen Literatur*. 2nd ed. Chicago and London: The University of Chicago Press.

Bosworth, J. and T. N. Toller (eds.) 1972. *An Anglo-Saxon Dictionary*. Oxford: Oxford University Press.

Buck, C. D. 1988. *A Dictionary of Selected Synonyms in the Principal Indo-European Languages*. Chicago: The University of Chicago Press.

Hall, J. R. Clark. 1984. *A Concise Anglo-Saxon Dictionary*. Toronto: University of Toronto.

Keizer, A. 1918. *The Influence of Christianity on the Vocabulary of Old English Poetry*. Diss. University of Illinois.

Lehmann, W. P. 1986. *A Gothic Etymological Dictionary*. Leiden: E. J. Brill.

Pokorny, J. 1994. *Indogermanisches Etymologisches Wörterbuch*. Tübingen und Basel: Francke Verlag.

Roberts, J., C. Kay and L. Grundy. 1995. *A Thesaurus of Old English*. Vol. I. London: Rodopi B. V.

Watkins, C. (rev. and ed.) 2000. *The American Heritage Dictionary of Indo-European Roots*. Boston: Houghton Mifflin Company.

Heorte and *Mod* in the Four Old English Gospels

Keiko YAMAMOTO

The purpose of the present work is to make a semasiological study of the rivalry among the Old English synonyms *heorte*, *mod* and *(ge)ðanc*, employed by the translators and glossators of the four Old English Gospels. Although they have generally been perceived as synonyms, analysis of the conditions of a number of witnesses reveals that they had well-defined distinctions, which may have been blurred in the other Anglo-Saxon works. While Vulgate was remarkably consistent in rendering these words from the Greek original, the translators/glossators of the Old English manuscripts were apparently quite deliberate in trying to convey all the finer shades of meanings, including the religious character of *heorte* that should resist any transgressions and more secular functions of *mod* and *(ge)ðanc*.